

◆ 巻頭言

人身取引撲滅に向けて劇映画は何ができるか

阪本 順治

私自身、人身取引については、無知でしかなかった。今回、このテーマの映画化を託され、初めて資料を読みあさり、取材をし、そして知れば知るほど、うろたえるしかなかった。映画『闇の子供たち』の製作を進めながら、一つの思いにたどり着いた。それは、世の中で起きているすべての争い、矛盾、問題、あるいは災害でさえ、この現実に戻結する。つまり、人の売り買いにたどり着く。逆の言い方もできる。すべての問題の根っこは、人は売り買いできるという発想から始まっている。搾取と征服だ。人身売買というより、人心売買である。人の尊厳が売り買いされる、弱者から順番に。そして、彼らを踏みつけた者たちが、手をつないで、グローバリゼーションが成り立つ。

映画の中で、私は子どもへの性的虐待をあからさまに表現した。買う側の醜い裸体を撮り、痛みを苦しむ子どもたちの表情を正面から撮った。子役には、売春婦という職業の存在と、なぜこの映画をつくるのかという意味・意義を「わかった」と言ってもらえるまで説明し、撮影の段階でも、買う側の裸体は一度も眼に触れさせず、一切触らせず、大人と子どもは別々に撮った。そこまでしても、この事実を伏せず描こうと決めたのは、人の想像を超えた現実があるからである。想像させて、終わりでは、多分、特に日本人は自分の都合のいいようにしか、解釈しないだろうと思ったからだ。“他所ごとでしかない”と思われては困ると考えた。

子どもだけではない。諸外国の多くの女性たちが、騙されて日本に連れて来られ、売春を強要され、時には、殺傷事件にまで至る。日本人は他国においても自国においても、関与どころか心の略奪者である。

私がそうだったように、この現実直面し、うろたえ、たじろぎ、自らの恥を自覚すること、まず、日本人はそこから始めるしかない。



PROFILE

阪本 順治
(さかもとじゅんじ)

1958年大阪府生まれ。『どついたるねん』で映画監督として鮮烈なデビューを飾る。代表作に、『顔』(00)、『KT』(02)、『この世の外へ クラブ進駐軍』(04)、『魂萌え!』(07)、『カメレオン』(08)。最新作『闇の子供たち』は、タイの幼児売買春や人身売買を通して、日本人のあり方に鋭く迫る(8/2～公開)。